

## チコちゃんと QOL

中河原 俊治 (QOL 研究所長 人間生活学部長)

近頃、5才のチコちゃんが流行語大賞にもノミネートされた決めゼリフで「ポーっと生きてんじゃねえよ！」と大人たちを叱っておりますが、それは日常的な、どちらかというと素朴な疑問について「なんで？」と問いかけてもたいていの大人が答えられないからです。まあ知らなくてもどうでもよいようなことも少なくないですが、しかしながら「なぜそうなのか？」という問いは非常に重要です。特に私たち大学人にとっては「なぜそうなのか？」を学生に説明すること、そして学生がそれを常に意識して自ら答えを見出す力をつけさせることは大学の存在理由でもあり、基本的な教育だと思います。そうはいってもこれはなかなか困難で、たとえば私たち生物の多くは空気がないと生きていけません。「なぜそうなのか？」を理解してもらうことは必ずしも容易ではありません。ヒト(生物)が生きていくことに必要なエネルギーをどのように獲得しているのかということは、生化学で説明されますが、さらにそれが「なぜそうなのか？」となると分子生物学、あるいは分子進化学の理解が必要になるでしょう。でもそれらは膨大な知識体系であり、その基礎に立つものであるがためそれを真に理解することには相当な困難が伴うわけで、これをどのように学生に示せばよいのか甚だ難題です。おそらくこういった状況は人間生活学部すべての教員にとっても共通の悩みでしょう。したがって大学教員には「学習指導要領」などないのだから個々の教育内容についてどこまで理解させるかを検討しなければならず、そしてそれは卒業後どんな仕事で活躍できるかということによっても左右されるものでしょう。人の生活の quality がさまざまな専門分野ごとに定義されていて、それらの総合的な向上に貢献するべく研究と教育とを行うことが人間生活学部の使命ですが、それらの定義、あるいはその実現策のそれぞれに伴う「なぜそうなのか？」をしっかりと教育することが重要だと考えられます。そのため有効なのがアクティブラーニングだといえますが、こういった大学教育の質的転換に対応できない大学が淘汰されるという認識はすでに一般化していると思われる。

しかしながら昨今の学生はまず「どれを覚えればいいですか？」と聞いてきます。もちろん覚えなければならないことも少なくないけれど、それを覚えさえすればよいということにはなりません。そして私たちとすればその次に「では、なぜそうなのか？」という問いを期待するところですが、残念ながらそれが返ってくることはまずありません。人間生活学部では国家資格や教員免許の取得を教育の軸としているため、ともすれば国家試験に出題されるから教える、出題されないから教えなくてよい、学生は理解しなくてよいといったことになりかねない危険性ははらんでおりますが、そうなるしまえば高等教育の本質を見失うことになるでしょう。もとより学生が高校までに勉強＝暗記と捉えているきらいもあるように思われ、まずこの点から大学教育の内容を整理しなければならないというところが厳しい現実だと思われる。

人間生活学部が「なぜそうなのか？」を意識できる人材を社会に送り出す高等教育を提供しているということは現在のところ社会からも評価されていると考えられますが、こういう教育が高校生にきちんと伝わり、その意義が理解され、そして高校までに十分勉強してきた高校生が本学部を選んでもくれるかとなるとまだまだやるべきことは少なくありません。十分な意欲と学力を有する高校生に人間生活学部を選んでもらえるよう、ゆりかごから墓場までの各ステージにおける quality を合理的に向上させるという難題に取り組んでいる大学として引き続きそういった人材を養成していくことが学部の、そして大学の生き残りにつながっていくものと確信しています。

